プロセス依存傾向に関する実証的研究

○藤井義久¹

(¹岩手大学教育学部)

キーワード：精神医学, 物質依存, プロセス依存

Empirical study on process dependence tendency

Yoshihisa FUJII¹

(¹Iwate University)

Key Words : psychiatry, substance dependence, process dependence

目 的

Khantzian and Albenese (2011) が述べているように, “依存症” は, 世界的に関心が強まっている精神医学的問題の 1 つである。その依存症に対する考え方が, “精神疾患の分類と手引き (DSM-5)” (American Psychiatric Association, 2013) において大きく変わり, 何らかの物質を多量に体内に摂取することで快感を得ようとする, いわゆる “物質依存” と異なり, ある行為そのものに没頭することによって快感を得ようとする, いわゆる “プロセス依存” である “ギャンブル依存症” が “薬物依存症” と同じカテゴリーに入った。さらに, “プロセス依存” と考えられている “ネット依存症” などについても検討を進めることになった。しかしながら, 精神医学の世界でも, 依存症研究及び治療と言えば “物質依存” が現在もお中心で, “プロセス依存” について総合的に分析しようとした研究は, 極めて少ないのが現状である。

そこで, 本研究では, この度, 正式に研究及び治療の対象となった “プロセス依存” 研究発展のために, プロセス依存傾向を総合的かつ客観的に測定できる “プロセス依存傾向尺度” を開発することを通して, 一般成人のプロセス依存傾向の現状と課題について明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象 層化二段階抽出法 (地域性と年代を考慮) によってサンプリングされた全国 (北海道～九州) の一般成人 (20 歳代～60 歳代) 計 400 名 (男性 200 名, 女性 200 名)。なお, サンプリングは, 全国調査会社である A 社に委託した。

調査方法 調査対象者の選定と同様に, 調査の実施に当たっても A 社に委託する形で, 訪問留置法によるアンケート調査を行った。具体的には, A 社の調査員が前述の手続きにより決定した調査対象者の自宅を個別に訪問し, 調査協力をお願いをし, 新たに作成した “プロセス依存に関する質問紙” および “休日の過ごし方に関する質問紙” を配布して回答を求めた。なお, 質問紙は, 先行研究や臨床事例などを参考にしながら新たに作成した。そして, 約 1 か月の間隔を置いて, 調査員が, 回答した質問紙を再び調査対象者の自宅に取りに伺う形で調査を実施した。なお, 調査に当たっては, 倫理的配慮の観点から, “自分の回答が他人に漏れる心配はないこと”, “答えたくない質問に対しては答えなくてもよいこと” など, 口頭及び文書で調査対象者に予め伝えておいた。

結 果

因子分析 “プロセス依存に関する質問紙” (35 項目) について, 主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果, 6 因子解が妥当であると判断した。しかし, 二重負荷の見られる項目が 5 項目あったので, それらを削除し, 再度, 同様の因子分析を行った結果, 最終的に, ギャンブル依存, パソコン依存, テレビ依存, ゲーム依存, 携帯依存, 買い物依存という 6 つの下位尺度, 各 5 項目ずつ計 30 項目から成る “プロセス依存傾向尺度” を開発した。なお, 下位尺度間の相

関は, .36 から .53 であった。

信頼性 “プロセス依存傾向尺度” の各下位尺度ごとに, Cronbach の α 係数を算出したところ, ギャンブル依存が .88, パソコン依存が .88, テレビ依存が .89, ゲーム依存が .87, 携帯依存が .88, 買い物依存が .87, 全体でも .83 という値が得られたことから, 本尺度の内的・一貫性が確認された。

妥当性 “プロセス依存傾向尺度” の基準関連妥当性について検討するために, “休日の過ごし方に関する調査用紙” によって調べられた各種実施時間 (分単位) と “プロセス依存傾向尺度” の各下位尺度得点との相関係数を算出した。その結果, 一般的に考えられている関連傾向と一致したことから本尺度の基準関連妥当性が確認された。

性差と年代差 一般成人のプロセス依存傾向の性差および年代差について検討するために, 二要因分散分析 (性×年代) を行った。その結果, ギャンブル依存傾向, 電子ゲーム依存傾向, プロセス依存傾向 (全体) については有意な性差 (男性>女性) が, 電子ゲーム依存傾向, 携帯電話依存傾向, 買い物依存傾向, プロセス依存傾向 (全体) については, 有意な年代差 (20, 30 歳代>40 歳代以上) が確認された。

考 察

本研究において, 依存症のうち, “物質依存” に比べてかなり研究が遅れていると言われている “プロセス依存” の傾向を総合的に診断できる “プロセス依存傾向尺度” を開発した。そして, 本尺度の信頼性についてはクロンバックの α 係数から, 妥当性についてはプロセス依存傾向とプロセス依存得点との関連性から検討した結果から, 本尺度には, 一定の信頼性, 妥当性が備わっていると考えられるが, この問題については今後さらに検討していく必要がある。今後, 本尺度の開発を通して, プロセス依存に関する関心や理解が深まり, 治療法の確立を目指した研究の増加が期待される。また, プロセス依存傾向は, 全体的に見ると, 一般的に 20 歳代, 30 歳代が強く, その後, 有意に低下していく傾向が見られるが, 種類別に見ると, 若い年代では特にパソコンに依存する傾向が強いのに対して, 年代が上がるにつれてテレビに依存する傾向の強まる傾向が見られる。このことから, プロセス依存においては, 特に年齢を考慮して治療に当たっていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5. American Psychiatric Publishers.
- Khantzian, E. J. & Albenese, M. J. (2011). Understanding Addiction as Self Medication: Finding Hope Behind the Pain. Rowman & Littlefield Publishers.

付 記

2012 年度依存学推進協議会研究助成 (研究代表者: 藤井義久) を受けて実施された。